同志社人物誌　(72)

師よ、師よ——上野直蔵

斎藤　勇
(大学文学部教授)

一九六〇年の六月某日、京都駅構内は時ならぬ報道関係者や群衆でごったかえしていた。私もその中の一人だった。上野直蔵先生がアメリカから急遽帰ってこられた、いや正確に言えば同志社大学に戻ってこられた、その出迎えの人々であった。というのは先生は在外研究中に学長に選ばれ、予定を切りあげて帰国されたのである。こういうことは異例のことであったし、その話題性もさることながら（因みに英文学専攻の学長も同志社では始めてではなかっただろうか）、前学長大下角一氏の急逝による緊急の選挙でもあって、同志社大学の教育行政にたずさわる各部署の首脳陣の人々もその重大性をわきまえてどっと駅に駆けつけられたのにちがいない。駅構内の然るべき場所で記者会見もあったようだし、そのまま拉致されるように大学に向われたように記憶する。大変もののものしかった。とても私がひとりのこのこ歩みよって挨拶するどころではなかった。喜びというより一種のとまどいを感じた。今日よりのち、上野先生はわが師、英文学科の至宝上野直蔵から、公人上野直蔵になられたという感懐であった。果せるかな公人としての上野先生のその後の働きは、後年の総長時代も含めてめざましいものがあったことは周知の事実である。その実行力、国際的視野、先見性、決断力、構想力、現実把握力のくさぐさについては今更私が学内外の諸文献を渉猟して語ることは楼上屋を重ねることになる。私個人にとっては、ヨーロッパ、アメリカへ出発される前に留守中博文論文の構想をしっかり練っておくように（因みに私は先生と同じ中世英文学を専攻していた）という厳命を心に体していたので公人上野にそういうとまどいを感じたのであろう。

先生逝かれてからもはや十年。先生を語りうる先生の先輩、同僚、友人もほとんど鬼籍に入っておられる。総じて今は上野先生のことが語られる場合。先輩、師としての上野である。で、ここに上野先生の先生にあたる方からの肉声を披露してみようか。一九五三年の初夏のこと、故太田藤一郎教授、滝本二郎の教授に伴われて私は、東京は下落合にある舟橋雄先生を訪れた。東京商科大学（今の一橋大学）から一九二八年に同志社に赴任され、のち文学部教授となられた（また同志社専門学校長もされている）。この方が上野先生の先

生にあたられる。その風貌は上野先生から折にふれてうけたまわっていた。若かりし上野直蔵のアメリカ留学に際して、古・中英語文学をしっかりやってこいと厳命されたという。下落会の隠棲宅を訪れた時はご老衰の様子で車椅子で応接室に現われられた。太田、滝本両教授がこもごも、思い出されますか、太田です、滝本ですと訴えられるが、ご記憶がない。ただ繰り返し、繰り返し、「上野君はどうしている」とたずねられる。同志社といえば上野直蔵のことしか頭になかったのである。舟橋先生が同志社奉職以前は英文学科は専任の教授もすくなく、嘱託講師で多くの講義をまかなっている有様であったときく。舟橋先生はつねづね英文学科拡充、再編成に心をくだいておられ、その将来を上野直蔵の学力と統率力と人物に託しておられたのであろう。ご寿命のぎりぎりまで「上野君は、上野君は」と気にしておられたのを私の目のあたりにした。このことを報告すると上野先生はすこし照れたような苦笑をされた。上野先生にまつわる人の知らないエピソードのひとつではあるまいか。

大学行政に関しての上野先生の業績は、うけたまわって感服し、大きい人だなあと実感するだけで、くわしくはない。それでじきじきに接したご指導とそのお人柄について語る以外はない。ところがいざそのつもりになってみると、まさに山ほどあって、何から語ってよいか、とまどうのである。それで、これから先生と私にまつわるエピソードをご紹介する。

なんといっても名伯楽であった。その学恩は生涯忘れられない。まず教え子の学問への適応性と動機を験される。大学院生の頃、先生はさる出版社からある和英辞書の改訂版編纂の依頼をうけられた。ひとりの先輩と私がお伝いを命ぜられた。旧版の見出語とその英訳をひとつひとつ切り抜いて大型紙に貼りつけていく。思いついた新しい見出語は欄外に書きこむ。という仕事である。華やかな文学研究を志していた私どもには実に退屈である。先輩某はとうとう投げ出してしまわれた。でも私は最後まで未熟ながらやりとげた。(ついでながらこの辞書は他の出版社がもっと早く計画していた新辞書の出現によって出版は中止されたが……)。その時の上野先生の言葉、「君は辛気くさい(じれったい)仕事もできる男やな」。大学院での修士論文のテーマにE・スペンサーの『仙界女王』とやってみよと、これも厳命のように勧められた。魅力ある作品であったが、これがまた大変難物で、正体の摑めない作品だ。四苦八苦してとにかく読了したことを先生に報告したら、この作品を全部読んだ人は今の日本ではすくないだろう。おめでとう、というので中華料理をご馳走になった。その食事の席上でのお言葉がまた「君は辛気くさい仕事ができる男やね」であった。この辺から先生は斎藤をまさに「辛気くさい」分野である中世英文学の世界に引きずりこもうと決心されたらしい。舟橋、上野と継がれてきた同志社の中世英文学研究である。この場合もある先輩の方を競合者としてつけられた。私はそれにサバイブしなければならないのである。必死だった。前述のスペンサー以上に「辛気くさい」W・ラングランドの『農夫ピアス』の研究で文学博士の学位を頂いた時、学部の卒業式と同時に博士学位記授与式があった。私は登壇して学長上野直蔵の手からじきじきに学位記を頂いた。握手を求められ、かすれた小声で「おめでとう」と声をかけられた時は感無量であった。

時には上野先生の指導は強引だと教え子が噂をしたこともある。否応なしにテーマを押しつけられる。好きな作品の研究もできない、というのである。しかしこれは英文学科のスタッフの研究領域に片寄りがないように、つまり平均のとれた科目提供という将来的展望を、まるで将棋盤上の駒をしっかりとした「読み」ですすめるように勘案しておられたからである。そういうことが今にして分る。因みに上野先生は勝負事はお強かった。おそらく法人同志社や同志社大学の人材抜擢、行政、全国規模の諸国体の役職などもこのような「読み」でたずさわられたのであろう。「キミらに話しても僕の苦労は分らん。全国の私立諸大学のお世話をしているのも、究極はキミらのためだ」と仰言った。この言葉の行間を読めなければ、上野先生の大きさも理解できないし、また先生の学長時代や総長時代に誠心わずかばかりのお手伝いをさせていただいたことも無為となる。

すこぶる人情家で、ひとたびその人物を見こんで身柄を引き受けたら決して見捨てられない。これは私が語るまでもなく、ご指導を受けたおぼえのある人々の異句同音に漏らしている事実である。同志社大学は一九五〇年、修業年限二年の短期大学部を夜間大学として并設した（これは一九五七年まで存続する）。私はその英語科の助手をやれ、ということで、同志社の教員として第一年目の修業時代をそこで過した。教務担当の先生に昼間の大学の一般教育の英語の講義ももつように要請された。しかも第一講時を一週間ずらりとである。これは辛かった。早朝より夜九時五十分まで働きづめである。ある夜、のっそりと上野先生が短大へやってこられ、食事に誘ってくださった。そしてしんみりと「辛いやろ、辛抱しろ。来年はちゃんとしてあげるから」という言葉を頂いた。文句なくほろりとした。翌年私は大学文学部英文学科の助手に転任したのである。

やがて講師に昇任すると、直ちに恰も天からの命令であるように大学院の博士課程に入学することを言いわたされた。（当時は同志社大学の専任教員であっても、講師の身分である間は同時に博士課程の学生であることも認められていた）。私は新制の大学院の博士課程の第一期生である。この時期一定の猶予期間をおいて旧制による文学博士号を審査する権利を同志社大学も依然としてもっていたが、やがてある時期からは新制度による博士第一号を送り出さない限り博士論文審査権が失せる、ということちゃんと先読みしておられ、私がその犠牲者（？）になったわけだ。古英語を学習させられた。これはゲルマン祖語に近い英語で、格変化も多く、現代の英語を読み慣れた人々にとっては難解至極な言語である。グルゴリウス教皇の『牧者の務め』の古英語訳に付されたアルフレッド大王の序文の全語彙の変化表を作製することを課せられた。容易ならぬことである。「斎藤君、こういう訓練はやっておかなああかん。僕はシカゴ時代にもやらされた。おまけに指導教授との一切の手紙のやりとりは古英語で綴るよう指示されたくらいや。古い文学や言語をやる人は焦ったらいかん」。カード数百枚の品詞毎の変化表一覧をアルファベット順に整理して提出した。同年輩のもっと新しい文学を学んでいる同僚たちは華やかに学界にデビューし、論文も書き、翻訳も出している。羨しい。僕も、と思って先生に訴えてみた。「現代とは異質性の強い中世をやっている者が、まだ十分に備えもできていないのに乳臭い論文など書

くな。恥をかく。書かねばならん時には僕が指示する」ときつい忠告を頂いた。果せるかな学位論文完成の見込みがたち始めた頃、俄然、論文を書け、論文を書け、と矢の催促である。お蔭で一年半ほどの間に四、五編の論文を書きあげた。評判もよかった。同志社に斎藤という中世英文学でしたたかな男がいるという認識も得たようである。上野先生は満足そうであった。

その後の私の博士論文出版（南雲堂）も先生の肝入りによるものである。ところが、ある日、学長室に電話で呼び出された。「ちょっと来てんか」。いつもこの調子である。おそるおそる伺候すると、大きな壜に百円硬貨が一杯つまっているのを示された。これは毎日百円硬貨を使い残したらそれを全部これに放りこんでおいたものだ。君の処女著書出版の一助にもなればとかねて思ってね。ということなのだ。私は目をむいた。あとで郵便局で計算してもらったら十数万円もあった。これには一切のコメントは必要ない。もともと私どもにとっては上野先生は恐い存在だった。あの紫野のお宅にうかがう時には急坂を登りつめねばならぬ。したたかにシンドイ。いつもさて何を叱られるのやら、と心配して坂を登ったものだ。しかしこんな温情したたる人であるのだ。柔剛を展望をもって見事に使い分けられる。だからそのお人柄にはまったく参ってしまう。口先の感識の辞は空しい。またそういう感識の辞はお嫌いであった。そういう時には「イヤイヤ」とか「ハアハア」と言って掌で額を隠して応じられる。そもそも先生は照れ屋であるのだ。あまり情意を臆面もなくむき出しにされない。大相撲もプロ野球もお好きであったが贔屓（ひいき）の関取やチームの名を表沙汰にされない。勝負へのとり乱した一喜一憂を人前で見せるのを好まれない。

学部の学生の頃、先生の部屋（教務部長室）を訪れた。実は敬遠しながらも止むを得ぬ相談事があったのである。親父（おやじ）さんいるかな、と屈（かが）んで鍵穴からそっと内を眺いてみた。片目をつぶって用心深く……。すると背後からとんとんと誰かに肩を叩（たた）かれた。「君、僕はここ」。上野先生だ。お行儀の悪いところを見つかってしまった訳だ。穴があったら入りたかった。（もっとも鐘穴は目の前にあったが）。明治生れを誇りとしておられた先生のこと、雷声叱咤を覚悟したが、表情ひとつ変えず「サ、お入り」だけで済んだ。むしろこの無作法な書生の仕種を滑稽とみておられたふしがある。また当時スタインベックのある短篇集も教室で読んで頂いていた。ある女子学生、「先生、この動詞は自動詞ですか他動詞ですか」。「あなたはどう思われます」。「両方あると思います」。「それは自他ともに許しませんね」。我々は笑った。しかし先生は表情ひとつ変えられない。これはイギリス流のヒューモアの精神に通ずる。総じて作った巧みは嫌われた。

学内外で行政上多忙を極められた晩年、私を呼んでしんみりとこう言われた。「もうじっくりと学問をする時間がなくなった。中世英文学は君にまかせた。あとは君が後継者を養成する番だ。よろしく」。私はかしこまって引き受けた。それでも一九七〇年に日本私学振興財団常務理事に新任された数年間にチョーサーの『トロイルス』論を公けにされた。私は当時の横浜の磯子のお宅に駆けつけて御著のお手伝もすこしはさせて頂いた。

公けの席で一喜一憂したりオロオロされることは絶えてなかった、と先程申しあげたが、さすが八十歳を越えられると、割合に人前で

生の情緒をそれと分る程示されることもあった。大相撲が大好きで、しかし贔屓の関取の名は明かされないのが常であったが、ご自分もその部長をされたことのある同志社大学相撲部出身で、前頭上位までとった服部関（後の藤ノ川関）の成績には心配でたまらぬという風情で一喜一憂をかなりはっきり示しておられたご様子だ。私と二人きりの時は、お嬢さんのこと、お孫さんのことを破顔一笑で愉快そうに話された。ところが、ところがである、奥様のことは余り……。やはり明治生れの頑固な照れ屋さんであった。

決して兼好法師のように徒照なるまゝにではないが、心にうつるよしなしごとを「そこはかとなく」書き綴れば、すこしは恩師上野直蔵のイメージが浮き彫にされたのではないだろうか。困難に強い、冷静に将来を展望する明治生れの一研究者、大学行政者、弟子思いの（そしてちょっぴり人使いの荒い）師。義理がたい（同志社大学英文学の衰退期に真摯に律義にご助力を頂いた京大教授山本修二先生には終生、季節のけじめには挨拶に赴かれたという）、厳しいが温情溢るるお師匠様。

私は自分の著書はずっと先生のご紹介で出版させていただいたが、三冊目は自力で中央公論社から出版した。先生はその出版を楽しみにしておられ、まだか、まだか、とおたずねであったが、出版は先生ご長逝の二十日後であった。口惜しいかな。跋文で先生のご冥福を祈った。その後『同志社時報』七十八号（一九八五）が上野先生の追悼特集号を編んだ。その号の「新刊紹介」欄にくだんの拙著の書評が掲載された。天の配剤によるおひきあわせか。せめてもって冥利とすべし。